

民間放送との関連について

井 出 定 利

1. はじめに

放送利用の大学公開講座は、各担当大学の企画協力を得て民放局を通じて制作され、放送されて来た。私どもは普段その中で働いているので、そのことを特に意識はしなかったけれども、一つのテーマとして考えてみるとこれは大変特徴的なことかも知れない。

私は世界の放送事情には通じていないが、世界の国々では放送番組をいわゆるスポンサード・プログラムを組んで放送しているところはほんとにわずかで、放送形態の殆どは国営放送か、もしくはそれに近いものであると聞く。国営放送で大学講座の番組が放送されるならばそれは形としてよくわかるが、民放のチャンネルを通じて国が一つの事業としてこのような番組を放送することは、そしてそれが10年も続いていることは特筆されるべきことと思われる。実際俗悪と非難されるくらい大衆路線を走る民放プログラムの中であって、この公開講座はいい意味において大変異色である。しかしその異色であるところに担当局の制作者は、ひとつの誇りや使命感を持って番組づくりに努力して来たことは断言できるし、評価されていいことのように思う。

ただ一つ、この民放であるが故に一般の視聴者や大学関係者の方々からよく指摘されるのは、放送時間帯のことである。早朝や深夜ではなく、もっと歓迎される時間帯で放送してほしいということである。これに対してはマーケット・セグメンテーションによって、いくつかの試みがなされては来た。例えば午前10時～10時45分（信越放送）、同9時30分～10時15分（熊本放送）などがあげられよう。しかしこれとても受講生から不満が出ることが多い。ゴールデンタイムを除けば、どの時間帯がいいかは、一般の人にそれぞれのラ

イフスタイルもあってなかなか難しい問題であるが、こればかりは民放論理が働いている。

2. 民放としてのベクトルから

視聴率競争の修羅の中にある制作担当者にとって、大学講座番組でも、レイティングや視聴者の声の反響が大きいことは、青春をとり戻してくれる最もよい音楽である。

- この種の番組の視聴率としては驚異的であった。あくまで先生方の努力の結果であるが制作者の冥利につける幸せと誇り（60年度、東北放送「日本史のなかの宮城」）
- 再放送を望む声が多く驚くほど多かった。市議会でもとりあげられ、好番組と評価された（60年度、新潟放送「にいがた、自然と環境」）
- 驚くべきほどの反響があった（61年度、中国放送「広島を振り返る」）

こういう声を聞くと私どもも大変嬉しい。レイティングが高ければいいと言うものでないが、放送は一人でも多く視聴されることを歓迎する。

それでは表現の問題の上で、民放としての特徴をつくって来たのであろうか。表現の問題になるとNHKであろうと、その他の公共放送であろうと、本質的な問題は同じと思われるが、民放だったから——という何かはひょっとしたらあったのかもしれない。その点から少し問題をふりかえってみたい。

おそらく民放であるが故に放送公開講座に特徴な色をつけたとすれば、その唯一のものは、“先生、どうぞやさしく面白く”という局側からの要求の度合の強さであったらと思う。レイティングを稼ぐという計算と習性の中で仕事をして来た者として、無意識のうちにもそういうことが、あるレベルにおいて（時には必要以上に）、講師の先生方に要求されたのではあるまいか。

これはもちろん想像上のことであり何んの確証もないし、或はテーマに沿った論を進める上での一つの類推による視点である。問題は、そうであったかもしれないという状況を設定した上で、“その結果として”到達しているのかも

知れない現在の時点の検証を試みたいからである。

一つは、“やさしく面白く”（レベルを落さずに）という、ある意味では大変虫のいい要求が、放送公開講座ではそうはいかない——という難しさに、全ての制作担当者が気がついたことである。

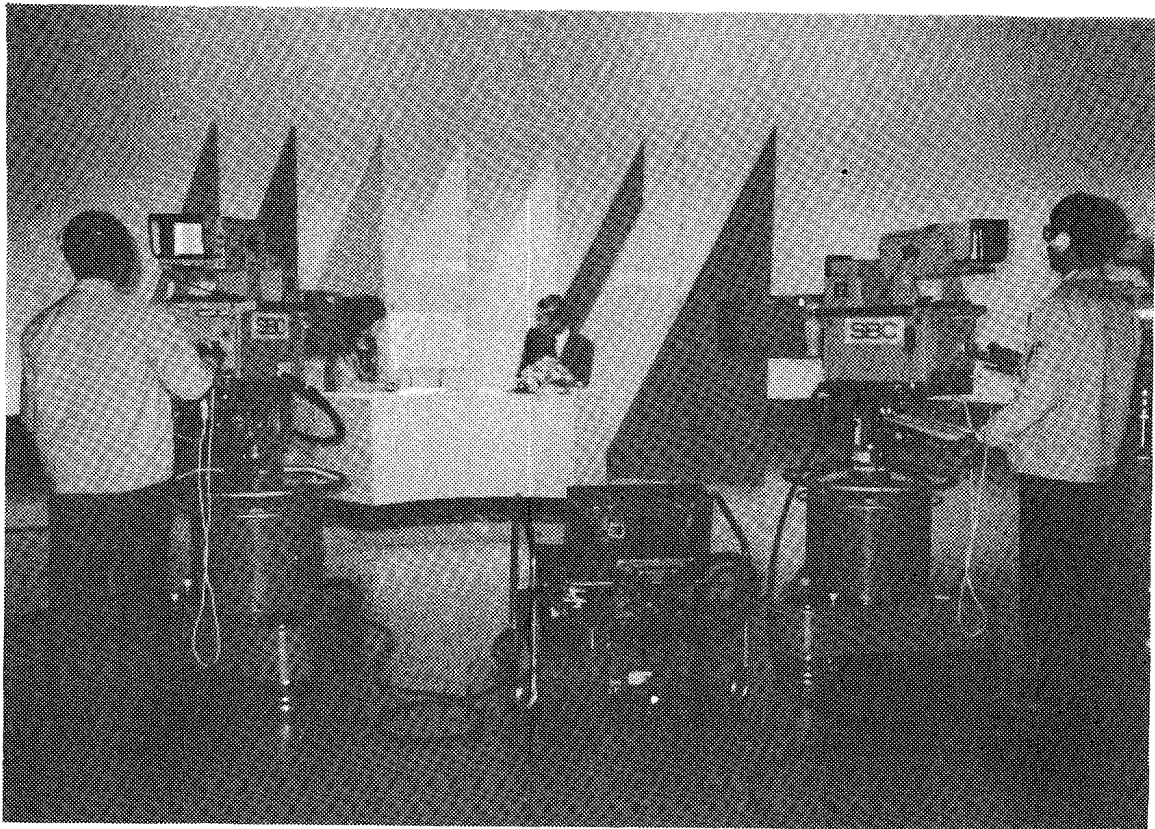
公開講座が10年たった今、やさしく面白くということに（理論的、体系的な内容をもつものが教育番組であり、それは又画像になりにくい、という問題はここでは措くとして）、それほど楽観的ではいられないということは、過去における次のような局担当者からの発言でも明らかである。

- 専門的な内容をやさしく普遍化することは、大学でも大変頭を悩まして
いる（北海道放送）
- 定性的なイメージを持ち込む時、どうもアナロジーを使い過ぎる。ところ
ろがアナロジーを使ってやると、一義的なことが多義的になってしまう。
即ちアナロジーというのは、受け手側の体験や経験の差によって全然イメ
ージが違ってくる。わかりやすさのもつ落とし穴の一つである。（東北放送）
- 現在の視聴者は想像以上に学問的レベルが高いと見ていい。
- 「天然から得られる薬の話」で、大学が学習効果の充足度を調査した。
その結果充足度が高いのはカメノコを使った難しい所（局スタッフが悩ん
だ所）であった。“とにかくやさしく”ということにはおとし穴がある。
（中国放送）

しかしながら民放的であろうとなかろうと、わかりやすさ、面白さは、苦し
いけれどもやはり追求されねばならない。その結果として（？）もう一つ出て
来たことは、自然科学系の番組をわかりやすくするにはどうしたらいいかとい
うシンポジウムが開かれたことである（59年度）。

これは自然科学という、最も民放にも映像にもなじみにくいテーマに長年取
組んで来た東北大学—東北放送が放った特筆すべき内容であったと思う。ここ
で話されたことは、この問題を考えるためのほんの入口のことであったが、多
くの示唆に富むことが提示された。例えばパネリストの細谷東北大教授が「視

聴者が番組を見て、でも——とか、じゃあ——とかの、講師のしゃべった内容とは違った考えをもって質問をしてくるような番組がいい番組だと思うが、この場合には、正確さというものを相当犠牲にした番組づくりをしないとダメであろう。」という発言をしていたのが、私には大変印象に残っている。これは映像の本質をついた発言であり、その後この延長線で私なりに、自然科学系の番組をわかりやすくするには——ということについて私見も発表させて頂いた。



スタジオ収録風景

今でもこのテーマは私自身の中にかかえており、深めて行って見たいと思っていることであるが、このような問題がでてくるのも、或は民放としてのベクトルが生んだ結果かもしれない。

放送公開講座が始まって以来、最初は“やさしく面白く”という点をめぐって、大学と放送局の間で綱引きが行われたようである。しかし今や綱引きで済むような次元を越えて、大きな深い問題としてある。公開講座は今までの蓄積をふまえて、第三の点を探り、第三の次元に飛躍する時であろう。そのために

は両者の綱引きということ言えば、局の担当者が今まで以上に大学側（講師）に近づいて、“やさしく面白く”についての第三の道を模索することが、今最も必要のように思われる。

放送公開講座は、いくつかの矛盾やら問題やらを内蔵しながら進んで来ている。

- 一般の視聴者向けに作ると大学で利用しにくい
- 課題解決のプロセスを見せるのか、学問の成果か
- トップレベルで行くか、基礎講座か
- 地域性のテーマか、普遍のテーマか
- 募集受講生（テキスト）が少ない問題、等

しかし、こういう多くの課題をかかえながらも、少しずつ着実にいい方向に進んできており、中にはある解答のようなものも出て来ている。例えば次のようなことはどうであろう。

(1) 公開講座は、放送メディアのもっている性質上、正確さはある程度失われてもいいのではないか。

(2) テキストとの関係は、各々独立した関係（或は相補的）でいい。テキストはテキストとして1本の線、放送は放送による1本の線を作ることによって相乗的な効果が出るのではないか。言い換えれば、印刷メディアと放送メディアは認識の構造が違うから、放送メディアによる学習到達点はテキストと違っていい。しかしこの場合、制作者のメディア的再構成の実力が問われる。

更にこのことは、番組内容の詰め込みすぎ、講師の、言葉への頼りすぎ（テキストに書いてあることを全部しゃべろうとする。）なども解決するかもしれない。

(3) 講座番組であるから画（え）にならない所が多い。しかしそこには論理（言葉）がある。これも又番組を面白くする武器である。講師のバスト・ショットを撮る場合でも、画がないから講師におりる（撮る）のではなく言葉（論理、パーソナリティー、人間くささ）も武器として取り入れて行く。

(4) 放送公開講座の場合、ラジオも多くの可能性をもつ。テレビに比べて完成度が高いということの意味を考えると、それは又多くの展望をもたせてくれる。

3. 課題その他

かつて民放でも学校放送が行われ、私が小学生の理科番組の制作を担当していた時、制作スタッフによってこういう調査が発表されたことがある。

番組が終わった後、先生が見た内容に何んの補促説明をすることなく、生徒に自由に視聴ノートをとってもらう。そうすると2ヶ月3ヶ月と継続視聴（この継続ということが大事である）しているうちに、理解したことや内容を説明する子供たちのノートが、文章から図解に変わってくる事例が多くなることに気がついた。

これはおそらく継続視聴によって、情報（映像）を読みとる訓練がなされたと見ることができるし、もう一つは、わかったことを図解で書く方が文章で書くよりも速くて面倒くさくないからであろうとも解釈できる。そこで図解でノートをとった子供に質問をしてみると、ちゃんと内容をつかんでいて、すらすらとその図解に従ってしゃべってくれる。これは別の言い方をすれば、おそらく番組の内容（わかったこと）をイメージとしてつかんだ、或はつかむようになったと見ていいであろうし（その場合、この子供にとって言葉は不要。もちろん必要があれば、わかっているからどんどん出て来る）、そういう学習がテレビを継続視聴することによって出来て来たことと考えられる——。

私は放送と教育ということを考える時、いつでもこの風景が原点として思い出される。放送と教育ということは、結局このイメージと教育ということに関係してくるであろうし、この深いテーマは放送教育開発センターのテーマとして調査研究がどしどしなされて行くことを期待している。

制作期間がもっと欲しいという声が毎年、大学と放送局側から出ている。制作期間が短かいと当然先生の負担も大きくなる。また学術的な実験や内容は、

長期にわたらなければ取材できないものが多い。いい質の番組を維持するには、少なくとも1年前からの制作取材を可能にするような方策がはかられる必要があろう。

30分×26回という放送形式が、予算も含めて真険に考えられていい時であると考ええる。

放送による大学公開講座も、センターのご尽力により10年の歴史と経験をもって、地域社会にはかりしれない量と質の種子を播いて来た。今後は新しい1歩を踏み出す時と考えられる。1年に1つのテーマだけでは大変にさびしいという視聴者の声も多い。45分という時間も再検討の声があがっている。さしあたって、30分×26回という線が、理想として遠ざけられずに実現の方向として検討されるよう、切に希望したい。

60年度のシンポジウムで、イギリスのオープンユニバーシティの作品（飛ぶ鳥のメカニズム）を見せて頂き感銘を受けた。この課題解決型（と仮に呼ぶとして）のような方向もまた、公開講座で十分考えられていい。いやむしる難しい高度な学問的成果も、その考えられて行った過程をたどって行くと無学な我々でもよく理解できることが多い。大学での勉強は極論すれば、人文科学、自然科学とを問わず、ある課題を定量化して行くことを学ぶことであろうと思う。であるとすれば、この課題解決型の番組は、大学群の講座で是非試みていただきたい方向と内容をもっている。そしてそれは一般視聴者にも楽しいものとなるろう。

表現の問題は、欲ばりすぎると自らの足をひっぱることになるろうが、面白さはやはり追求されねばならない。公開講座の場合、それは新しい発見とか、知的な興奮とかであり、この世にある最もいい価値をその中に含む。またその面白さの源は、広く浅く——ではなく、せまく深くの方向にしかないであろうことも確かであるような気がする。

またアンケート調査によっても、本講座に対する評価は各地できわめて高い。何しろ居ながらにして、その地域の大学のトップレベルの講座が視聴できるのであるから、ものぐさな視聴者にとってはこれはこたえられないことであろう。そういう視聴者を手練手管を弄して(?!) involve すること——こう考えれば放送利用の大学公開講座も、まだ少しずつの前進はあるであろう。新たな出発と開発を試みたいところである。

最後にアメリカの事例で、我々の事情に共通していることを感じさせてくれる文章が目についたので、蛇足ながら引用しておきたい。

「大学放送番組でも、入門レベルのコースは、一般的に制作の質が高まる傾向がある。この理由のひとつは高等教育のプロデューサーたちが、単位取得を目的とする学生ばかりでなく、一般視聴者をも引きつけるような素材を開発しようとしているからである。その番組が二つの層から視聴者をひきつけることができるなら、テレビ局の編成部長が、その番組を望ましい時間に放送する可能性があるからである。」〔「アメリカにおける、放送による大学教育の経験」ジェームズ・ジグレル(シカゴTVカレッジ責任者)『MME研究ノート』83. 11月 小玉美恵子・阿部美哉訳〕